

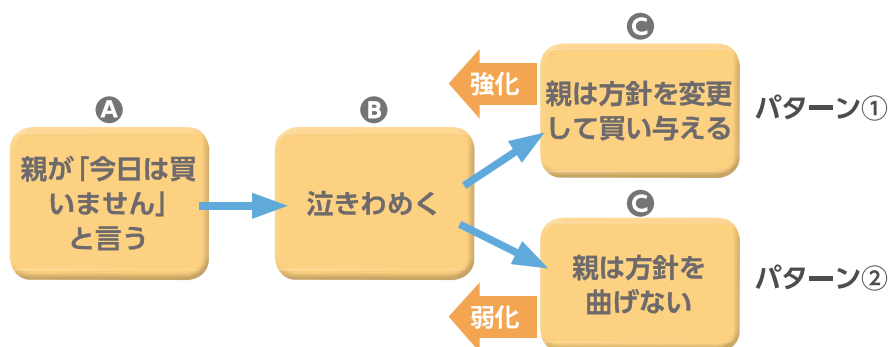
シリーズ

発達に違いのある子どもたち 子どもの気持ちと行動を コントロールする

ショッピングモールに出向くと、子どもの好きなおもちゃ売り場やお菓子売り場で、時折見かける光景があります。欲しいものを買ってと泣きわめくお子さん、そしてそれに立ち向かうお父さん、お母さん。最終的には親の方が折れて、子どもの言う通り買ってあげる場合もあれば、どんなに子どもが泣きわめようと、親が買わない意思を貫き通す場合もあります。どちらのパターンが正解ということではないですが、この後どのようなことが起こるのか、少し分析します。

応用行動分析 (ABA) という視点

子どもは日常のあらゆる場面で「学習」しています。その中身は、良い「学習」もあれば、困った「学習」もあります。いずれにせよ、それを強化したのは周囲の大人であることに変わりはありません。先ほどの例を、応用行動分析の「ABC分析(A:状況、B:行動、C:結果)」に当てはめてみます。



パターン①では、Cで買ってもらったことで、Bの「泣きわめく」行動を強化してしまいました。ここで子どもが学習したことは「泣けば自分の要求が通る」ということです。このあと同じような場面に遭遇した時、泣き方はさらにパワーアップし、親もよほどの覚悟がないと方針を貫くことができなくなります。パターン②では、Cで親が方針を曲げなかったため、子どもはBの「泣きわめく」が有効でないことを学習しました。これを行動の弱体化といえます。

望ましい行動の学習

パターン②では、子どもの「泣きわめく」行動を弱体化しましたが、そこで終わりにすると、子どもは達成感がありません。望ましい行動の学習につなげるには、親が買ってくれなかったにもかかわらず、泣き止めたこと、我慢できたことを、子どもが落ち着いたら褒めることで行動を強化します。

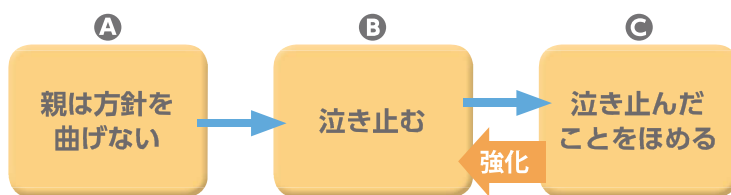
子どもが欲しいものがあるにもかかわらずいる時には、店に入る前に「今日はお菓子は買いません。泣いたら外に出ます」などの事前予告をします。店に入り、欲しいと泣きわめくことなく過ごせた時は、我

慢できたことをしっかり褒めます。我慢できずに泣きわめいた時は、必ず予告通りに外に出ます。そしてもう一度同じ事前予告をします。これを繰り返すことで、子どもは「泣いても通用しない」ことを学習します。

褒められた時、その都度シールを貼り、貯まったらご褒美がもらえるという「トークンシステム」を活用するのも良いでしょう。

子どもの望ましい行動の学習には、親は子どもの行動に冷静である必要があります。泣き止ませるために、叩いたり、罵声や暴言を言うことは、まだコミュニケーション能力の未熟な子どもに、誤ったコミュニケーション方法を教えることとなります。また、周囲の大人が方針を統一することも大切です。

子どもを褒めるためには、親も自分を褒める機会を増やすことです。どんな些細なことでも、例えば自分自身が我慢できた時、きついのがんばれた時、何かを忘れずに実行できた時、自分のやれたことをしっかりと認め、褒めたりご褒美をあげたりしてみましよう。



<文書寄贈>
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてつぷ」
<参考文献>
子どもの観察力&支援力養成ガイド / 学研
発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ / 講談社

